

# アサーティブ課インターンシップ 体験記

心理学部 心理学科

15PP012 重村菜穂子



## 1. はじめに

私は、追手門学院大学の学生である。

2017年7月～9月の約二ヶ月間、追大実践型インターンシップ生として、追手門学院大学入試部アサーティブ課にインターン生として業務に携わった。

追大実践型インターンシップは、ビジネス現場での本気のチャレンジを通じて成長したい人を対象に、追手門学院大学が独自に開発した中長期実践型プログラムである。

私自身インターンシップに参加したことがなく、取り組みたい気持ちはあったものの、どのようなインターンシップに参加するか迷っていた。しかし、やるならば短期で終了するものではなく、長期でじっくりと自分の成長を実感したいと考えていた。そんな時、アサーティブ課のインターンシップを知った。私自身がアサーティブ入試の1期生でもあり興味を持ったことと、教育と経営について同時に学べるのではないかと考えた。調べてみると、学内インターンシップとして今年度（2017年度）から始まると知り、是非1期生としてチャレンジしてみたいと思った。また、学内で所属している部活動の拘束時間が長いいため、同じ学内でインターンシップを経験できることも魅力であり参加を決めた。

インターンシップ生に与えられた達成目標は、以下の2つである。

- ① 社会人としてのマナーを身に着けること
- ② アサーティブ課の取り組みを学内・学外で多くの人に知ってもらうこと

そして、これらを通して学んだことを報告書としてまとめることである。

## 2. アサーティブプログラムとアサーティブ入試

アサーティブとは直訳すると「自己主張する」である。しかし、自分の意見を押し通すのではなく、相手の気持ちを大切にしながら、自分の気持ちを率直に誠実に素直に表現することが大切であり、そのためにも「自己を知る」ことが大切になると考えた。「この大学で学びたい」という意欲を認識して入学しなければ、学生自身の成長につながらない。そのような思いから誕生した教育プログラムと入試である。

### <アサーティブプログラム>

アサーティブプログラムは3本の柱で構成されている。

- ① 追手門学院大学の職員との個別面談  
高校生自身が自分の人生と向き合うように促し、自分に問いかけることにより、何をすべきなのか考えられるように促すことを目的としている。

② 追手門学院大学独自開発の学習システム「MANABOSS（マナボス）」

MANABOSS システムには弱点克服に向けた計画的な学習を促す「基礎学力」と、議論する力を身につける「追手門学院バカロレア」がある。「基礎学力」のシステムには言語能力問題と非言語能力の分野があり、自分の得意分野や弱点などが可視化され、漠然とした勉強ではなく基礎学力向上が可能となるシステムである。また、「追手門学院バカロレア」では、答えが一つではない問題にじっくり向き合い、考える力を養い、SNS 上で参加者同士が議論することで、他者の意見を受け入れて、自身の意見を発信する力も養う。

③ 自己成長を促す「アサーティブノート」

自らのことを理解し、大きな視野で周りの状況を見極め、自分で考えたことを、相手にしっかりと伝える準備ができるノートである。アサーティブノートには常に自分を主語にして書くというルールがある。ノートに書くことで、自分の気持ちを整理することができ、また読み返すことにより成長を感じることができる。

### <アサーティブ入試>

アサーティブ入試は、一言で表現すると「アサーティブプログラムで培った力を発揮する場所」である。思考力・判断力・表現力や、アサーティブな態度、大学で学ぶうえで必要とされる基礎学力、大学で学ぶ意欲についてなどをグループディスカッション、基礎学力適性検査、個別面接を通じて評価する。

### <入学前学習>

合格者には、大学入学までの高校生活を充実させ、大学で学ぶことの意義をより深く見出してもらえるよう、入学前学習として課題を用意している。生まれてから毎年分の“10大ニュース”を調べ、社会の動向と自分の人生を照らし合わせながら、学びが社会生活と強く結びついていることを実感していくことを目的としている。

### ～ アサーティブプログラム・入試の今後の展望 ～

志村アサーティブ課長に今後の展開についてお話を伺った。現在、アサーティブプログラム・アサーティブ入試は関西圏からの受講者、受験者が多い。学力だけではなくコミュニケーションや協調性も必要となる新しいプログラム・入試を、関西圏以外の学生にも知ってもらいたい。そのために、地方開催のアサーティブガイダンスも実現させ、アサーティブスタッフと一緒に運営することを構想している。また、様々な地域の出身者交流は、学内の活性化にも繋がると考え、将来的には、アサーティブ入試に Skype 面接などの導入も検討して、遠方の受験生にも対応したいと考えている。常にアサーティブプログラムとアサーティブ入試について模索している。

### 3. アサーティブプログラムとアサーティブ入試を振り返って

アサーティブプログラム・アサーティブ入試を受けたことは、私にとって人生の大きな転機となった。

進路に迷っていた高校3年生の頃、追手門学院大学のオープンキャンパスに参加した。そこで、アサーティブプログラムを受ける事にした。大学に進学しないという選択肢もあるなか、何のために大学に行くのか、学んだことをどう活かしたいのかなど、大学の人と1対1で話をした。大勢いるガイダンスや説明会ではなかなか質問をしにくいこともあるが、大学の人から自分だけのアドバイスをもらえたことはとても嬉しく、心に響いた。なんとなく大学へ進学するのではなく、しっかりと目標を立て、その目標に向かうための場所に進むため受験するのだと改めて思った。

アサーティブ入試ならではのグループディスカッションも記憶に残っている。従来の入試は、合格のため1点でも多くの点数を取ることが重要になり、受験生みんながライバルになってしまう。しかし、アサーティブ入試のグループディスカッションは違った。同じグループでディスカッションするメンバーは、全員が仲間でなければならない。協力し合わなければ試験を乗り切れないからである。出題されたテーマに対し、メンバーの話を見聞かなかったり、一言も発言しなかったり、自己主張が強く意見を通したりするメンバーが1人でもいると、そのグループ全体の得点が下がると思った。きっとグループのみんなが同じように思ったのではないだろうか。そのようなメンバーがいても、一緒に合格するという気持ちがないとグループディスカッションは通過できないと思った。

私が受験した時は、会話になかなか入れないメンバーがいたので、話を振ったり意見を聞いたりして参加できるよう心掛けた。また、グループディスカッションの試験当日に声をかけた受験生がいた。名前も連絡先も聞くことはなかったが、お互い合格しており入学式で再会した時の感動は忘れられない。

アサーティブプログラム・アサーティブ入試を受け、大学生活では、新しいことを始めてみようと思うようになった。幼稚園の頃からスポーツをしていたので、大学ではスポーツをする選手を支える立場を学んでみたいと考えた。そして、選んだのはラクロス部のマネージャーである。ラクロスは格闘球技といい、フィジカルスポーツで怪我が多い種目である。テーピングや筋肉組織の勉強など、マネージャーをしていないと気づけなかったことがたくさんあった。

学外活動では、関西で有名な十日えびす祭でご奉仕する福娘に応募し、大阪天満宮でご奉仕させていただく事になった。

私は今しかできない事に、挑戦する事の大切さをアサーティブプログラム・アサーティブ入試で学んだ。この入試で受験していなかったら、これらの挑戦はなかったかもしれない。もしかしたら、目的や目標を持たずに大学に進学していたかもしれない。

約2ヶ月間であったがアサーティブ課のインターンシップを通して多くの気づきがあった。

実習前に就職・キャリア支援課が実施している研修を受けた際、秘書検定の資格を取得していた私は、資格の勉強と変わらない研修だと感じた。しかし、実際インターンシップ生として勤務してみると、まったく通用しない。研修はあくまで研修であり、実践で活かせるようにすることは簡単ではないことが分かった。

業務内容は、アサーティブ課やアサーティブ課の取り組みについて調べる事から始まり、オープンキャンパスやアサーティブガイダンスにも携わった。その中でも、特に印象に残っていることは、併設校の高校生のAP（アドバンストプレイズメント）科目で使用する日報を作成する際、インターンシップ生の提案した内容が採用されたことである。この業務を通して、チームで協力して働き、それぞれの良さを生かして、形に出来たことがとても嬉しくやりがいを感じた。将来は、何かを作り、商品やサービスを販売するような職に就きたいと強く思った。

このインターンシップで、迷っていた自分の将来について深く考えることができ、やりたい分野を見つけることができた。ここで経験したことを、今後の就職活動などで活かしていきたいと思う。

新しい入試を作ること、プログラムの準備や運営などにこれほどまでに多くの人に関わっているとは思わなかった。冊子1冊、ポスター1枚作るのにも、何度も修正を重ねて作成していた。個別面談などで高校生と実際に話すため、研修を行なっていることも知った。

アサーティブ課の職員は常に多忙な印象だったが、それでも時間を割いてインターンシップ生を指導していただいたことに感謝している。

以上